

(2) 教育 IR センターからの総合報告 - 2019 年度 (令和元年度) -

京都三大学教養教育研究・推進機構 教育 IR センター長／京都工芸繊維大学 教授

萩原 亮

はじめに

当教育 IR センターの任務 3 年目の総合報告をさせていただきます。本年度は、府立大学の織田昌幸教授ならびに新たに運営委員に就かれた京都府立医科大学の長崎生光教授とともに、センター運営を務めさせてもらった。運営の流れなどに慣れてきた今の段階で、ようやく共同化科目の全体構成や受講者動向の意味するところが客観的によく見えてきたと実感する。結果的なことを先ず述べると、共同化され広範・多彩になった教養科目の姿は、今や学生に十分に浸透しており、今後、自然な形で継続していく流れに乗っていることが確信できる。ただし、本共同化の形がうまく機能しているとしても、教養科目そのものが、高等教育のベースとして根付き、その教育効果を十分に発揮しているかどうかについては、反省の姿勢も含めつつ今後も思慮を重ねていく必要があるだろう。ともあれ、できるところを一步一步進めることが、あらゆる前進の源であるから、当センターの活動も、まずは例年に倣う形で堅実に進めさせてもらった。本報告も、その路線に沿い、毎年続けている履修者数の年次推移の情報を整理した結果から示すことにする。

1. 履修登録者数の歴年推移

共同化授業各科目の履修登録者数は、毎年、報告書上で公表されており、当センターではその情報を IR 活動の一環として追跡している。先ず、共同化開始以来の、大学別の履修登録者のべ総数の推移をグラフにして図 1 に示す。上下の (a)、(b) は、前・後期の別である。昨 2018 年には、府立大学で履修単位上限 (CAP) 制が導入されたことが影響して、府立大の登録学生数が約 2 割急減 (相当分だけ工繊大の履修者が増加) するという、やや異常な変化があり、その後の推移を注視していたが、本年度には一時的な異常からはほぼ

回復して、トレンドの関数ラインに戻ったと見ることができる。ただし、履修者数が前期に集まる傾向も強固であり、このことと CAP 制度の条件の下で、大学別登録者数が、前後期でそれぞれ特徴的な人数比の値に落ち着いているものと理解される。現在、開講科目数を前期に寄せる調整が少しずつ進んでいるので、今後は、そのことが大学別人数バランスに及ぼす効果に注意しながらデータを追うことになるだろう。

個別科目ごとの履修登録者については、昨年の報告と同様の形で歴年追跡したグラフにまとめ、図 2 と 3 に掲載する。人数を対数値にしているので、規模がまちまちな各科目の受講者数の動きを年度間の比として観ることができる。ただし、各ラインと科目名との対応については、直近 2 年度以内に新規開設されたものに限って示している (担当科目と照合される場合には、2017 年度報告に掲載した図を参考にされるか、IR センター宛お問い合わせをいただきたい)。

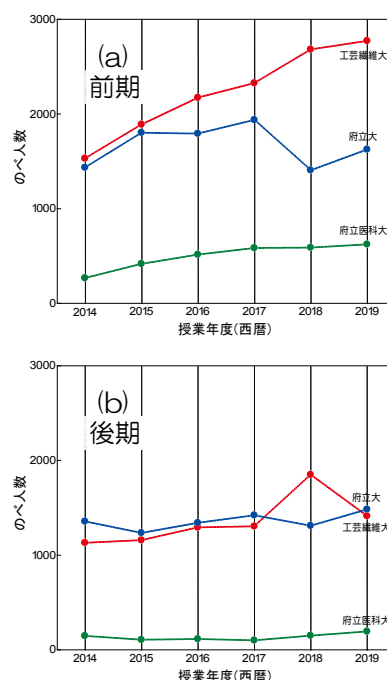


図 1. 大学別履修者総数の歴年変化
(a):前期, (b):後期

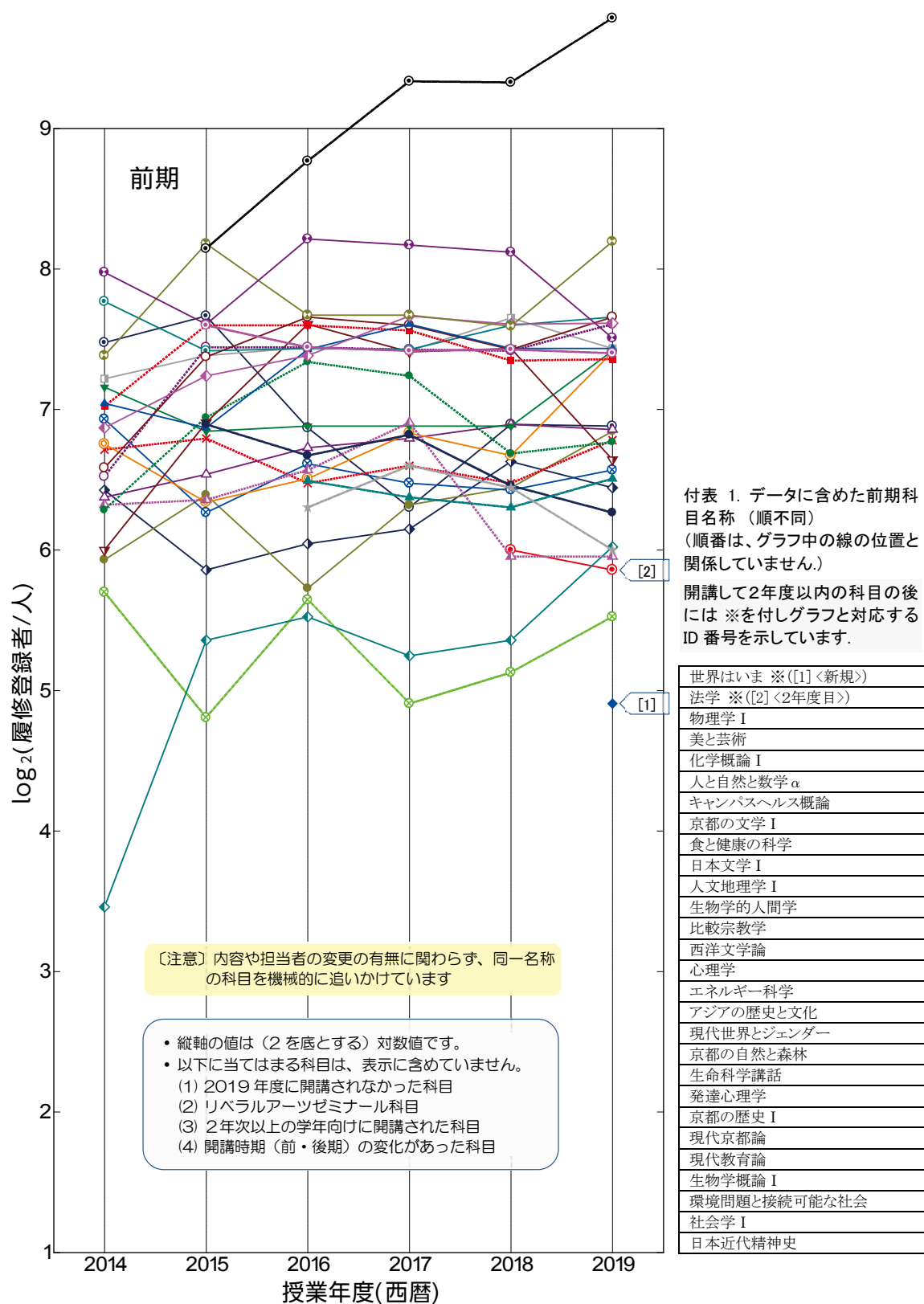


図 2. 各科目履修登録者数の歴年変化 (前期開講分)

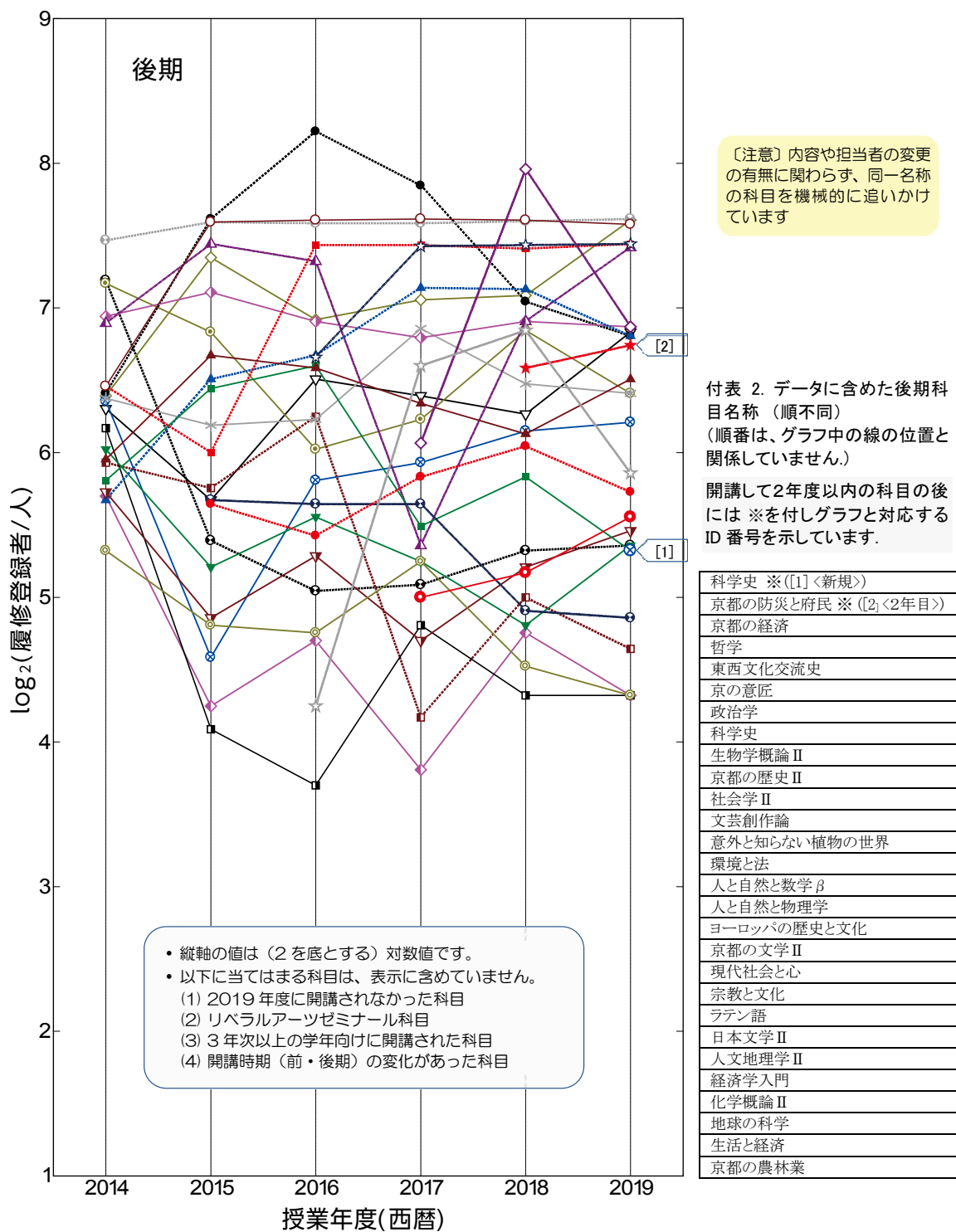


図 3. 各科目履修登録者数の歴年変化 (後期開講分)

ライン全体が描くパターンを、前・後期別に眺めると、大局的な動向がわかる。前年の報告では、前期は高止まり安定的、後期は不規則な大幅変動を示すことを述べた。そこからの進展を探る観点に立てば、今年度の後期のパターンに若干の変化の兆しが見える。前年から本年度への各科目履修者数の変動は従前に比べて小さく、ほぼ水平に伸びたラインも目につく。さらにまた、人数がいくつかの段階に分かれて収束しているようにも見える。こうした受講者数の安定は、教室割りあて等の実務サイドおよび授業を組み立てる教員サイドのどちらにとっても、計画を立てやすくしてくれる好ましい傾向である。

以上のように、開始2年目に行われた定員制限の見直しから足掛け4年間に渡った緩和的現象が観察されたことになるが、もちろん、安定・定常的に至ったからそれが最適だとは言えない。受講者が大人数となる場合には、その教育環境、効果、成績評価などに関する検討が必要であろうし、少人数が定着する傾向であれば、能動学習の形式を積極的に採用できる一方で、それに適した教室の確保が問題になる。こうした問題について、各担当者側と、運営の側が、(余計な手続き等を介さずに) ストレートに意見を交わせる体制を築くことが、今後に取り組むべき課題になると考える。

2.1 年次生アンケート

共同化科目を実際に受講した1年次生を対象に、後期の最終段階で、Web フォーム入力形式のアンケート(本報告書 p.47 ~ 48 に掲載)を実施している。授業アンケートとは異なり、個々の学生が履修科目を選ぶ際の意識の持ち方や、新たに求めている科目カテゴリーを察知して、抽選の採り入れ方や科目構成の立案に活かす役割を担っている。

以下では、現時点で得られている2018年度までの回答に基づいた見解をまとめるが、はじめに、

対象者総数に対して回答が返ってきた割合(回答率)に言及しておく必要がある。図3に、全体の回答率の歴年推移と、2018年度の大学別の回答率分布のグラフを示した。総合回答率は、特に前年度に大幅に落ち込んだが、2018年度には、従来の水準にまで回復した。ただし、35%(弱)の値に戻っただけであり、期待する十分な回答数は得られていない。大学別分布を見ると、回答率50%以上は工繊大のみで、府立大と医大で20%を下回っている。このアンバランスは、統計をとったときに工繊大生の回答に重みが偏る結果を招く。今後の計画策定に資する情報源としようとする立場では、かなり扱い難いものになってしまっている。工繊大では、学生のWeb アクセスを必須とする学務手続きが運用されていることが、高い回答率に寄与していると思われるので、こうした方式を三学間で統一して採用することが検討に値する。

上のことを念頭に置きつつ、いくつかピックアップした選択肢回答の推移を図4(a) ~ (c)に表してみる。(a)は抽選制度に対する学生の反応であり、2015年度以後2回目の調査までは肯定意見のポイントが上昇していたが、最近2年間は、そのピークからやや低下した位置に評価が落ち着いた感がある。例年、自由記述回答の中に、希望の集中と単位取得の容易さを関係づけた声があることを考えれば、特に本問については、ポイントの向上に意識を向けるだけでは、本質的な問題点を見失う恐れもある。抽選制の運営の仕方は、現状で一応完成していると考え、今後は、評価基準や学習時間についての考え方に議論の観点を向けていくことがより大切になるだろう。

(b)は科目の満足度であり、最高値が常にポイント4程度に達していることは、教養科目を規則によって強制的に取らされていると感じる学生がいる現実を踏まえれば、十分高い評価にあたる。

(c)は、他大学生との交流の機会の回数を問

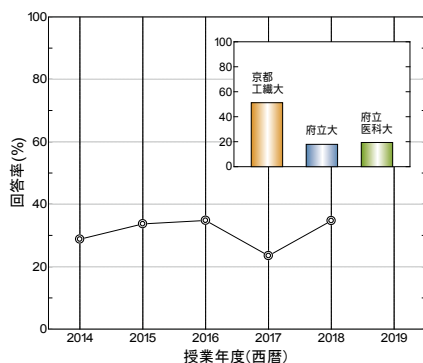


図 4. 1 年次アンケート回答率 (%) の推移.
挿入図は大学別の回答率 (2018 年度) .

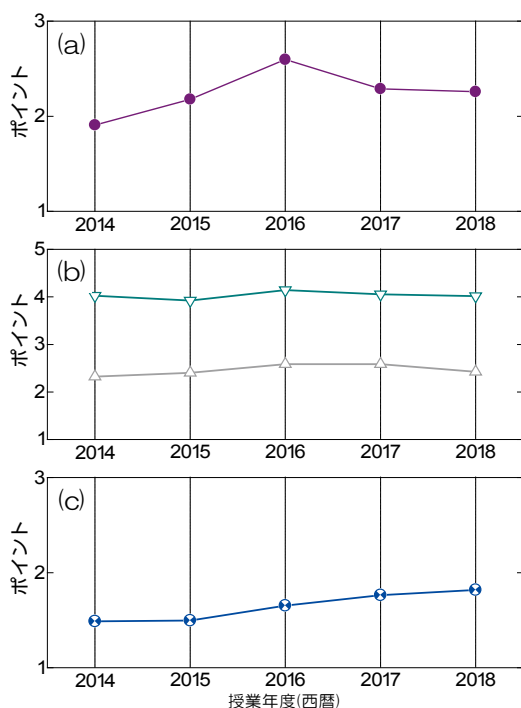
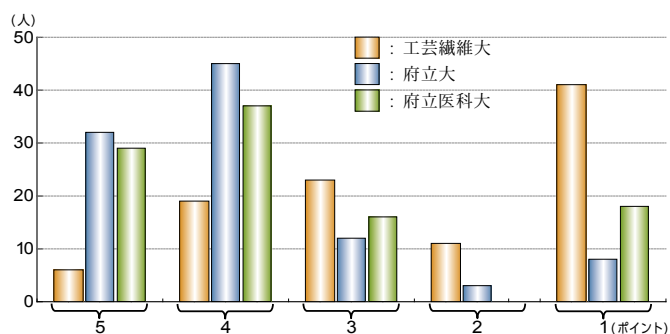


図 5. 1 年次生アンケート結果(ポイント化し得るいくつかの事項)の年次推移. (内容は各右側に記載)



問 3., 3-1 履修登録科目を選ぶときに、「京都三大学教養教育共同化科目受講案内」(オレンジ色の冊子)どの程度役に立ったか。
とても役に立った ⇒ 5
役に立った ⇒ 4
少し役に立った ⇒ 3
役に立たなかった ⇒ 2
利用しなかった ⇒ 1

図 6. 1 年次生アンケート問 3 の 3-1 に対する回答の大学別人数分布.

うた結果である。平均値が年度を追うごとに少しずつ着実に上昇しているが、前回には、少人数の参加者の側からは交流が十分肯定的には受け取られていない可能性も指摘した。この傾向は、今回の調査でもほとんど変わらなかった。各担当教員諸氏には、もし担当クラス中に少人数の大学の受講生がいる状況であれば、このことを多少意識して、発言の誘導などを工夫されるとよいと思う。

その他、大学間での差が顕著であった項目について付記する。「受講案内」の冊子が登録科目の決定に役だったかどうかを問う設問では、府立大生の大多数が肯定的に答えたのに対して、工繊大生の多くが利用しないと答えている（図6）。この冊子には、シラバスとは異なる形のメッセージ欄もあるので、工繊大新入生に対する当冊子の配布や紹介の仕方に工夫を加えるなどして、活用を促してもらうことを望みたい。また、建物・設備に対しては、府立大生が辛めの評価を与えるのに比べ、他大学生の評価値は明らかに高い。学生の‘ホーム’と‘アウェイ’の感覚の違いが現れた形だが、1年生が感じる大学の設備水準（教室まわりのトイレ等）に対する希望が表れたものとして参考にすべきとも言える。

なお、自由記述を通じて伝えられた受講生の意見は、機構内で十分検討し、対する回答をまとめて（各大学の学生向けポータルサイト上に）掲示する取り組みを続けている。これは、回答率の低さの難に関わらず確実な意義をもつことと、あらためて認識している。

3. 共同化科目担当者会議 および教員アンケート

毎年度に、共同化科目の担当教員の中の数名の方から、各位の授業の実践に関する報告をしていただき、様々な情報の共有と意見交換を行う「共同化科目担当者会議」を開催している。本年度は、11月25日に、山田悦 先生、長岡徹郎 先生、

塚本康浩 先生 の3名の方にお話しいただいた。当日の参加者は32名であり、活発な意見交換がなされた。報告された内容は、本報告書第3部に授業研究の形で掲載しているので、是非ご覧いただきたい。

また、共同化科目ご担当者全員を対象として、電子メールによる記述方式の「教員アンケート」を実施している。細事から全般的なことまで、各科目の内側から得られる情報やご意見ご要望などを何なりと伝えていただければ幸いである。後日に、寄せられた内容に対する機構各担当からのコメント等をまとめ、一括してメールでお知らせする予定である。

4. 授業評価アンケート

各大学独自の授業アンケートとは独立に、共同化科目用のアンケートを実施している。回収された結果は、機構事務側で（委託業者も使い）集計・チャート化した上で、各担当教員宛に届けられるので、授業内容のさらなる工夫・発展に役立ててほしい。

むすびのひとこと

今さらではあるが『大学』の（古典的な）歴史に興味を惹かれている。大学は、自由学芸を志す者の共同体として誕生したらしい。その純粹理念に対して、産業革命、科学の制度化などの流れが次々に楔を打ち込んでいった。‘考える葦’たる人の素朴な営みに、近代科学の凄まじい効用を支配や富や名声に結びつけようとする欲望が介入したわけである。この経緯が土台となって、異種理念がせめぎあう今日の大学の構造がある。異なる理念は、共存すれば新たな展望をもたらすだろうが、席捲を目指す争いとなれば、消耗と衰弱に行き着くのみである。共存の知恵を出せるか否か、その力が今我々にこそ問われている。